知可被下候事。

近年改作之法式改替申儀無御座候。乍然前々は百姓死去跡せがれ數御座候得ば、夫々高分申付候へ共、近年惣領迄申付候。且又百姓致難澁、下に而田地取遣仕置、以後に至出入等有之、第一百姓之縮にも不罷成候に付、近年切高と申儀相極、一度他に相渡候高取返し不申様に仕候。此外改申品茂無御座候。

十月九日

右前川宇右衞門、十月五日役所に罷出、覺書を以相尋候に付、追而可申達旨致返答置、返答書御用番壹岐殿に懸御目、其上に而宇右衞門役所に相招渡之申候。

九四　十村等川狩不相成事

一、御扶持人并十村、又は平百姓に而も、御用被仰付者、運上川を請獵仕儀は不及申、下請をも仕間敷候。取分大川筋などは、内形(ナイ)少に而も惡敷候へば、大分之川崩に罷成候付而、御扶持人・十村抔、魚梁打獵仕儀一向不罷成事。惣而諸運上物を請、手廻がましき儀不仕様急度可申渡旨、御算用場より被申渡候。

九五　領國内百姓分金澤に引越停止之事

一、御領國之内百姓分、金澤之町人共ゆかり有之候而も、其身有德成者引越罷出候儀、一向不罷成御定に候。商賣人は不苦候。先年松任かど屋と申者、金澤金屋彦四郎妹聟に付、彦四郎後屋に引越申儀御耳に立、闕所被仰付、彦四郎儀は籠舍被仰付。其以後百姓子共・弟など町に引越申儀不罷成候由也。

九六　大阪江戸廻米高覺

元祿四年大坂江戸御廻米高

一、二十萬四千八百七十三石

内

十三萬六千五百八十二石　木屋・升屋裁許上方船

六萬八千二百九十一石　地舟

一、二萬五千石　江戸廻

内

一萬六千七百石　木屋・升屋裁許上方船

八千三百石　地舟

廻米大坂・江戸に着候に、石に付十匁充諸事入用懸り物。

九七　珠洲郡馬緤本光寺之事

一、珠洲郡馬緤村曹洞宗　本光寺

塔　司守禪庵

本光寺法眷所口　惠眼寺

守禪庵旦頭　與九郎

藤三郎但肝煎

同村取持人　甚左衞門

久兵衞連判持參人

右檀那と出入、金澤祿所に達候由覺書也。

九八　百姓風俗之儀改作奉行より觸覺

一、諸郡百姓妻子・末々頭振迄茂、改作之御法忘失不仕筈に候處、年々ゆるかせに相成、心得不宜者も有之、別而金澤廻并小松・高岡等、其外府近き村々之百姓共、町人或遊民之躰を見習、次第に風俗惡敷相成、百姓不相應之趣多、殊更不謂公事沙汰を好み、手筋を求め諸役人之名をかり、右手入之儀を申立、小百姓をたぶらかし、賄賂を取渡世にいたし、宜敷百姓之心立をも引そこなひ候者有之段相聞え候條、諸郡御扶持人并十村等嚴重に遂詮議、右不屆之族於有之は、早速其段可及斷候。若不吟味にいたし置、此方より相尤め候はゞ、其組裁許之十村は勿論、廻り口迄も爲越度候條、自組之儀は不及申、他組之儀も相互に相糺可令穿鑿事。

一、諸郡百姓・頭振迄、用事有之御當地に罷出候刻、其組之裁許十村に相斷、十村より其節々改作所に相達候様に申渡置候所、今以無斷潛御番所に罷出居申者も有之由相聞え候條、組々遂僉議、右之族無之様急度可申渡候。向後金澤旅人宿に、切々拙者共足輕相廻し、委細承屆、若疑敷者有之は召捕可遂吟味候間、諸郡共此趣令承知、猶更嚴敷可相